

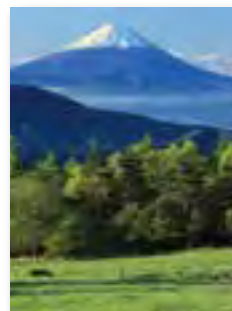
自然の恵み

私たち人間を含め、地球上の動植物は、自然からの恩恵を得て生活している。日本の各地では古くから自然の恵みに感謝する祭りが行われ、現代に受け継がれている。



自然の美しさ

自然は季節や時間によって様々な表情を見せる。地球上の自然には、極めて長い時間を掛けて形成されたものがある。また、ほんの一瞬だけ輝きを放つものもある。



● これまでの経験で、自然が美しいと感じたことや、自然から癒されると感じたことを振り返ってみよう。

私たちが、有限な存在である。そのことを謙虚に受け止めながら、その中で人間としてより良く生きるとは、どういふことを考えていきたい。

自然は私たちに感動や恵みを与えてくれる。同時に、自然は、人間の力を超えた力で、私たちに畏敬の念を抱かせる。

しかし、ときに、自然は荒々しい姿を見せる。海は荒れ狂い、山は噴煙を上げ、大地は揺れる。

人間だけでなく、あらゆる動植物は、自然の恵みによって生命を営んでいる。

地球の自然は、人類が誕生するはるか前から育まれてきた。美しい自然がある。



(2) 美しいものへの感動と畏敬の念を

自然との調和

地球環境保全の意識の高まりとともに、
人間生活と自然との調和、共存を目指す考え方が広まっている。
今後も、自然の恩恵を享受していくために、
私たちはどうすればよいだろう。

コウノトリ野生復帰プロジェクト

かつて日本の多くの地域で見られたコウノトリは、戦後、兵庫県豊岡市など一部の地域でしか見られなくなった。

減り続けるコウノトリを救うため、豊岡市では昭和40（1965）年から人工飼育を始めた。

待望のヒナが誕生したのは、人工飼育の開始から25年目の平成元（1989）年。その後、コウノトリの飼育下増殖が軌道に乗り始めると、コウノトリをもう一度野生に帰すことが現実のものとなってきた。

豊岡市では「コウノトリ野生復帰プロジェクト」を進めている。コウノトリの野生復帰は、単にコウノトリが生息できる豊かな環境を再生、創出するだけでなく、人と自然との関係を再生、創出することを目指すものである。

平成17（2005）年、最初の放鳥が行われ、現在では70羽を超えるコウノトリが豊岡の空を舞っている。



- これまで見たことや経験したことから、今後、私たちは自然とどのように関わっていけばよいかを考えてみよう。



自然は美しさをみせる一方で、
台風や豪雪、
地震、火山の噴火といった
人間の力では抗うことのできない
猛威を振るうこともある。

人間の力を超えるもの



自然の神秘を感じる
私たちは、
自然の神秘や美しさに感動し、
山野の変化や、
動物の営みを不思議に思う。
文学、絵画、音楽など
芸術作品の中で
自然を賛美しているものも多い。

- これまで見たことや経験したことから、自然の不思議さについて感じたことを書いてみよう。

saying

この人の言葉

The Rainbow

My heart leaps up when I behold
A rainbow in the sky:
So was it when my life began,
So is it now I am a man,
So be it when I shall grow old
Or let me die!
The Child is father of the Man:
And I could wish my days to be
Bound each to each by natural piety.

(原文記載)

「虹」

私の心は躍る、大空にかかる

虹の美しさを見たときに。

子供の頃もそうだった、

大人となった今もそうなのだ、

そして、これから年を重ねてもそうでありたい

そうでなければ、この世に生きている意味はない!

子供の頃の思いは、大人になっても忘れない。

願わくば、私のこれからの一日一日が、

自然への畏敬の念とともにありますように。

ワーズワース

■ウィリアム・ワーズワース (1770~1850)
イギリスのロマン派詩人。自然讃美の詩を多く書く。「抒情民謡集」「かっこう」など。

● あなたの感じたこと、考えたこと。

message

メッセージ

小学校の低学年のころだったでしょうか。手のひらにアリの乗せて歩いてみると、母がこう言いました。「そのアリさんは、手のひらの上にいるって気付いているかな?」この問いは、私の視点をぐっと引き上げる、衝撃的なものでした。中学生のときに出会った本や学校で習う大地や地球に関する授業で、私たちが暮らす地球という星がどんな形をしているのか、その内部には何があり、どのような活動をしているのかを知りました。それはまるで、みずみずしく活動する生きている地球の姿でした。それから私は、地球という生き物のとりこになりました。同時に、こんなに大きな生き物の上に暮らす私たちは、なんて小さいのだろう、との思いが強くなりました。私たちが人間は、私の手のひらにいたアリと同じです。アリは私の手のひらの上で、一生懸命に進んでいました。でも私はアリが進むより速いスピードで、前にむかって歩いていきます。アリはそれを知りません。そして、私がいつでも手を握りしめ、アリの握りつぶすことができるということも知らないのです。日本が地震国なのは、海底の岩盤である広大な「プレート」が日本の下に沈み込んでいくためです。プレートが動く理由は、地球の内部が対流していることにあります。このような地球全体の壮大な活動のうち、ほんの一部が地震という現象です。地震は、私たち人類が出現するずっと前から地球上で起こっています。ですから、地球にとつてごく自然な営みである地震を私たちが止めることはできません。地球という星に間借りをして暮らしているのは私たち人類の方で、私たちのために地球という星があるわけではないのです。手のひらの上のアリと、地球に暮らす私たち。こうして自分たちの小ささを知ることができれば、地球の恵みに感謝して、ときおり起こる地震には謙虚に備えようと思えるのではないのでしょうか。



私たちのために
地球という星があるわけでは
ありません。

大木聖子

●東京都出身。地震学者。高校1年生のときテレビで見た阪神淡路大震災の被災地の惨状に衝撃を受け、地震学者を志す。●単に地震のメカニズムを研究するだけではなく、災害情報や防災教育の研究に取り組み、命を守るための対策を広く訴えている。●現在、慶応義塾大学環境情報学部准教授。



大木聖子(おおきさとこ) 1978~

人間として生きる喜び



誰でも、自分に自信がもてなかったり、劣等感に悩んだり、誰かを妬んだり、恨んだりすることがある。

同時に、それはいけないと引き止めたり、勇氣を出そうと励ましてくれたりする良心をもっている。

そして、自分の弱さや醜さと、良心との間で、苦しみ、悩むことがある。人間として生きる喜びは、こうした苦しみに打ちかって、自分に誇りをもつことができたときに、生まれるのではないか。

- これまでの経験を振り返り、自分の心の中の葛藤に打ちかてたことを書いてみよう。

欠点や弱点のない人間はいない。
誰の心の中にも
弱さや醜さがある。

同時に、
人間はその弱さや醜さを克服したいと、
願う心をもっている。

誘惑に負け、
易きに流れてしまったとき、
「しまった」と思う心の揺れが、
良心なのではないか。

その良心の声に耳を傾け、
人間としてより良く生きようとする
自分を大切にしたい。



(3) 人間の強さや気高さを信じ生きる

あなたならどう考え、行動しますか。



杉原 千畝 (1900~1986)

杉原千畝は、第二次世界大戦中、リトアニアに外交官として赴任していました。ナチスドイツの迫害によりヨーロッパ各地から逃れてきたユダヤ人などの難民を目の前にして、自らの判断で通過ビザ(通過査証)を発行し、約六千人の命を救いました。

私も、何をかくそう、回訓を受けた日、一晚中考えた。
(中略)

ユダヤ民族から永遠の恨みを買ってまで、旅行書類の不備、公安配慮云々を盾にとつて、ビザを拒否してもかまわないが、それが果たして、国益に叶うことなのか。

苦慮、煩悶の揚句、私はついに、人道、博愛精神第一という結論を得た。

そして私は、何も恐ることなく、職を賭して忠実にこれを
実行し了えた、今も確信している。

杉原千畝の手記より

●先人の伝記などから、人間としての誇りある生き方について考えてみよう。

「今からの私」を育てていきたい

わたし

「変わったね」
むかしの友達に言われるたび、うれしくなるわたし
「いままでのわたし」は、いつも楽な方へ流され
わがままで友達の数も少なかった
「これじゃいけない」
そう思ったのは、6年生のとき



わたしは、少しずつ変身していくことを決心した
中学に進学することによって
わたしの心も考えも
困難をひとつひとつ乗り越えていこうと誓った
たくさんの人に出会い
たくさんのお考えや生き方を知り
たくさんのお悩みをかかえて一年が過ぎ
「いまのわたし」がいる
「いまのわたし」は、まだ完全じゃない
時々、「いままでのわたし」が顔を出す
そんなとき、「いまのわたし」が顔をひっこめる
少し後悔しながら…

これからはもっとたくさんの人と出会い
もっとたくさんのお考えや生き方を知り
もっとたくさんのお悩みをかかえながら
困難を乗り越え、生きる喜びを感じたい
そして、わたしのまわりにいる人に感謝しながら
「いまからのわたし」を育てていきたい

(中2 生徒作文)

●これからの私が目指す生き方とはどのようなものか、考えてみよう。

saying

この人のひと言

人を知る者は智なり、自ら知る者は明なり。
人に勝つ者は力有り、自らに勝つ者は強し。

老子

■ろうし (生没年不詳)
古代中国の思想家。道家の祖。

人間は
ひとくきの葦にすぎない。
自然のなかで最も弱いものである。
だが、それは考える葦である。

パスカル

■ブレーズ・パスカル (1623~1662)
フランスの哲学者、数学者、物理学者。『パンセ』など。

良心は魂の声である。

ルソー

■ジャン・ジャック・ルソー (1712~1778)
フランスの啓蒙思想家。『社会契約論』『エミール』など。

●あなたの見つけた言葉、考えたこと。

column

人物探訪

しばしば、人間の生命・尊厳は地球より重いと云われますが、歴史の中で、それが踏みじられてきたことがあります。

第二次世界大戦中、ナチスによるユダヤ人への迫害を避けるために故国を逃れ、オランダのアムステルダムへ逃れ、日々危機に直面しながら、日記を書き続けた少女がいます。その名は、アンネ・フランク。やがて強制収容所へ送られ、十五歳で命を落とすこの少女が、人間の生きる意味を見つめ、平和を希求しつつ書き遺した日記の一言一言は、戦後、世界中の多くの読者の心を打ちました。「希望があるところに人生もある。希望が新しい勇気をもたらし、再び強い気持ちにしてくれます。」

厳しい状況の中でも希望を見いだそうとしていたアンネの姿が浮かびます。「私が私として生きることを、許してほしい。」という言葉からは、どれだけ人間らしく生きることを求めていたかということが伝わってきます。そして「私は理想を捨てません。どんなことがあっても、人は本当はすばらしい心をもっている」とも信じているからです。」と、人間の気高さを信じる思いもつづられています。「私たちは皆、幸せになることを目的に生きています。私たちの人生は一人一人違うけれど、目的は皆同じなのです。」



私たちは皆、
幸せになることを目的に
生きています。

アンネ・フランク

●ドイツ、フランクフルト生まれ。ナチスによるユダヤ人への迫害を避けるために、家族と共にオランダのアムステルダムへ逃れる。1942年から隠れ家で暮らしていたが、1944年に発見され、ナチスの強制収容所へ送られる。●1945年3月収容先の強制収容所でチフスを患い15歳で死去。●隠れ家でアンネが記した日記は父の友人の手によって保管され、戦後、「アンネの日記」として出版され、世界中の人々に愛読された。



アンネ・フランク (Annelies Marie Frank) 1929~1945

アンネが見つづった日記

二人の弟子

池をめぐらした本堂の奥から修行僧たちの誦経が聞こえてくる。西山寺の深い木々の緑が白いもやの中からゆっくりと現れる。山門に立って深呼吸し、杉木立に囲まれた薄暗い参道に目をやった智行は、急な石段をゆっくり登ってくる一人の男がいるのを見付けた。ぼろの着物をまとい、髪を伸ばして痩せこけた男の姿に、一瞬、眉をひそめ、声を掛けようと歩み出して智行ははっと息をのんだ。「道信、道信なのか。」

5

智行は土地の名家の三男に生まれた。幼いときから才覚を發揮しこの寺の上人に師事していた。道信は智行と同年輩で、先の戦で孤児となり、上人が引き取って育てたのだった。若い二人の学問への深い情熱を愛した上人は、十四歳になった二人を都の本山へ送り出してくれた。

都での修行と学問の日々は今となっては懐かしいものだが、少年たちにはつらいものだった。智行は自分を励まして学問に没頭し、また厳しい修行にも必死の思いでついていった。

そんなある夜のこと、道信に呼び出された智行が聞いた話は思いもかけぬものだった。

「私はある女性のことが忘れられなくなってしまった。こうして勉強していることが、その女性と会っているのと全て無意味なように思われるのだ。」

白拍子
歌や舞いをする芸人。

15

その女性とは都で評判の白拍子で、学問一辺倒の智行ですら幾度かその名を聞いたことがあった。しかし、共に厳しい修行に励まし合ってきた同志だと思ってきた智行にとって、道信のこの言葉はにわかに信じられるものではなかった。元々道信は情熱的で一途だが少し突っ走るところがある。

思い詰めて周りが見えなくなっているのだろう。止めてやらねばならない。智行の言葉は厳しくなった。

「それは一時の気の迷いだ。白拍子だって本気で相手にするものか。お前は目の前の修行のつらさから逃げようとしているだけだ。目を覚ませ、道信。」

そのままうつぶさ、うなだれていた道信、肩を落として何かにじっと耐えているような道信の姿を

5

智行は昨日のことのように思い出すことができる。智行は道信が分かってくれたものと思っていた。二人で励まし合いながら続けてきた学問の道の大切さを道信もよく分かっているはずだった。

ところが数か月後、道信は本山を出奔してしまっただのである。それ以来、道信の行方は全く分からなかった。智行は道信の行為が、二人で励まし合った日々への裏切りのように思ったものだ。だが、いずれ道信には厳しい修行の道は合わなかったのだ。それだけの男だったのだと思い、自らの修行に熱中する中で、道信のことは記憶から薄れていった。こうして智行は都での修行を終え、知識を身に付け、立派な僧侶に成長して故郷の西山寺に帰っていった。

出奔
逃げ出すこと。

10

「あの白拍子にはすぐに捨てられてしまったよ。」

道信の言葉に、智行は古い思い出から呼び戻された。

15

「そんなことだろうと思ったよ。」

「その後はひどいもんだ。遊び暮らしが身に付いてしまっていたし、金はないし。随分ひどいこともやったよ。盗人みたいなこともやってしまったし……」

少しの間、道信は遠くを見るようにしていた。そしてゆっくりと言葉を継いだ。「それでも何とか生きられるものだな。人並みに女房を迎えて所帯ももったんだ。」

だがその女も二年後に病で亡くなってしまったということだった。かわいそうなことをしてしまっ

20

た、と道信は、ぽつりとつぶやいた。

「一体お前、ここへ何しに。いや、何だつて今頃、寺を訪ねる気になったのだ。」

智行は自分の声为非難がましいものになっているのに気付き、言葉を改めて聞いた。

「俺は死のうとしたことがあるんだ。」

道信は淡々と語った。まともな暮らしをしようとした矢先に妻を亡くしたことは道信にとって深い哀しみであったのだろう。再び酒浸りになり、そして今度はもう生きる意欲すら無くしてしまっていたのだ。捨て鉢な気持ちのまま、まだ雪残る北山へ向かったのだと道信は語った。歩き疲れ、雪に足をとられた。そのまま眠るようになって死ねたらという思いが頭をかすめたという。

「でもそのとき見付けたんだよ。」

道信の声が急に華やいだ。

「雪の中に倒れてこのまま眠れると思った。ゆっくりと雪が溶けていく頃にはもう冷たいとかいう感覚もなかったな。そのときさ。雪が溶けた地面の中に何か丸い茶色い物が出ていたのさ。小指の先ぐらいのがいくつも。妙に気になって周りの土をどけてみたんだ。そうしたら、見付けたんだよ。」

「何を。」

「フキノトウさ。まだ雪が覆っているのに。掘ってみるともう鮮やかな薄緑色なんだよ。」

道信の顔はとても幸せそうに輝いている。智行は子供のよう興奮して頬を紅潮させている道信の心をはかりかねていた。

「寺を出奔しても、盗みをやっても、女房につらく当たっても、悪いとは思わなかった。どうせ俺はこの程度の間人さ、つてね。後悔もしなかったよ。でもあのフキノトウを見たとき……」

道信は不意に言葉を詰まらせた。そして智行の目を真っすぐに見つめて言った。

「智行、私はもう一度修行をやり直したいんだ。」

「じゃあお前、この寺に戻りたいと言うのか。」

「上人様のお許しがいただけるなら。いや、許していただけるまで何度でもお願いするつもりだ。」

そんな勝手が許されるはずがない、と言おうとして智行は口をつぐんだ。自分が差し出がましく言うまでもあるまい。上人様は道信が期待を裏切つて出奔したことに深く心を痛めていらっしやう。今更戻りたいなどと言ってもお許しになるはずがない。

道信には、上人様にお話してみる、とだけ言って、智行は本堂の上人の元に向かい、道信の帰郷を伝えた。

意外にも上人は道信にすぐ会おうとおっしゃった。

上人には十年ぶりの再会である。もう一度この寺で修行を、と懇願するその男は、上人が愛したあの頬を上気させ目をきらきら輝かせていた少年ではない。修行を捨て、皆さんだ暮らしに手を汚し、進退極まって寺を頼ってきた貧しい男だ。

じつと黙って遠く道信を見つめる上人の深いしわの刻まれた険しい横顔を見ながら、やはり上人様のお怒りは解けないのだ、と智行は確信した。と、そのとき、上人は深くうなずいて言った。

「お前は本当にたくさんのお前を学んできたのだな。もう一度この寺で修行したいというのなら、ここで暮らせばよい。お前は今までもこれからもずっと私の大切な弟子なのだから。」

上人は道信の手を取った。その手は道信によってしっかりと握り返されていた。



●感じたこと、考えたこと。



思わぬ展開に驚き、智行はそつとその場を離れた。仏の道を一旦捨て、罪を犯した男が一体何のために戻って来たのか。上人様はなぜ、そんな男を再び弟子におとりになるといつのか。智行にはどうしても分からなかった。そしてその分からなさは、智行の中で次第に怒りに変わっていった。智行はその夜、意を決して上人の部屋を訪ね、こらえかねた思いを吐き出した。

「上人様、道信は修行を途中で放り出して逃げ出した人間です。そのような男をどうして再び弟子におとりになるのですか。あの男にはもう学問をする資格はありません。」

上人が何も答えないので、智行の声は更に力が入り上擦っていく。

「他の弟子たちは皆厳しい教えを守り、修行に耐えて勉強しています。そのつらさに耐え切れずに逃げた道信を許してよいのですか。脱落した者には厳しい態度で臨むべきではないのですか。」

智行の激しい言葉を上人は黙って聞いていた。やがて智行に優しいまなざしを向けてつぶやいた。

「智行よ、人は皆、自分自身と向き合って生きていかねばならないのだ。」

それきり黙して語らぬ上人に、智行はいたたまれず一礼して部屋を退いた。

上人の言葉の意味をはかりかね、僧房に戻る気にもなれず、智行はふらふらと草の茂った庭の小道へ歩き出した。

夜の月に照らされて、池の水がきらきらと光っている。月は、暗い夜の闇の中から池のほとりに咲く一輪の白ゆりをくつきりと照らしていた。その純白の輝きに智行の暗い心は圧倒された。知らずにあふれてくる涙を止めることができないまま、智行は月の光の中にいつまでも立ち尽くしていた。

僧房
僧の寝起きする建物。